

2010年度第4回FD研究会の開催報告について

学生の基礎学力・目的意識・就業観が多様化（あるいは低下・希薄化）する傾向にあつて、教職員は、彼ら彼女らひとり一人と向き合い、それぞれの個性や能力を見だし、その伸長を図っていかなければならない。その際、大切なことは「教え込む」ことではなく「気付かせる」や「考えさせる」プロセスを通じて、学生みずからが「主体的に取り組む」きっかけを与えることである。これは、学生個人と向き合う場面はもちろん、教室等で複数の学生と向き合う場面でも求められる考え方である。そこで、学生の学習意欲を高め、目標の明確化と目標達成へ向けた自発的な行動を促すコミュニケーションについて考える研究会を開催する。



【開催概要】

テーマ：教育の現場で機能するコーチング

講師：石川 尚子氏（国際コーチ連盟プロフェッショナル認定コーチ）

日時：2011年3月8日（火）13:00～15:30

対象：専任教職員ならびに非常勤講師

【プログラム概要】

適宜、演習を取り入れながら、コーチングの基本的な考え方について理解を深めるとともに、基礎的なコミュニケーションスキルを学ぶ。あわせて、「双方向・参加型」の教育を実践するにあたってコーチングがどのように機能するのか考えてみる。



【獲得目標】

- ・ コーチングの基本的なスキル（「傾聴」「質問」「承認」）の意義を理解する
- ・ 学生とのコミュニケーションの場で役立つコーチングスキルの実際を知る
- ・ 講義やゼミナールなど教育の現場にコーチングを取り入れることの意義を理解する
- ・ 教育の現場でコーチングを取り入れるにあたってのヒントを獲得する

【開催報告】

知らないことを教えること（ティーチング）は重要である。しかし、ティーチングには限界がある。「教えられる」、「答えが与えられる」ということが当たり前になると、学生は指示を待つだけの人間になってしまう。

コーチングは、自己肯定感というエネルギーを学生に注ぎ込み、学生自らによる前向きな行動を実現させるためのコミュニケーションスキルである。全ての学生は夢や希望を実現させる潜在的な力を備えている（そう信じて学生と接することが大切である）。けれども、現代の学生の多くは自己肯定感が欠乏しており、自分に自身を持つことができずにいる。そのような今の教育の場にこそコーチングは有効なものではないだろうか。

コーチングの実践には特別で難しい知識や技能が必要ということはない。まずは彼らの話にしっかりと耳を傾ける「傾聴」と「受容」から始められる。これはすぐに実践可能なことだろう。

